

ReD は記録することをねちっこく再考します

[ワークショップ ReD]

異物混入¹⁾

——知念ウシを読む——

「体内深く入った異物、それを完全に取り去ろうとすると血が流れる」

阿 部 安 成

めんそ〜れ ナイチャーズほか執筆者した『沖縄いろいろ辞典』（新潮社〔とんぼの本〕1992年）をかなり愉快地読んだ覚えがある。執筆者のひとり池沢夏樹の本をおもしろがって読んだのも、そのころだったとおもう。彼の『南鳥島特別航路』（日本交通公社出版事業局、1991年）や『南の島のティオ』（楡出版、1992年、文芸春秋〔文春文庫〕1996年）に描かれている場所には、無垢な心地よさや楽しさがあり、それを快く感じる純粋な気持ちがあると無邪気におもっていた。それは音楽をめぐってもおなじで、ネーネーズの曲が好きになり、りんけんバンドの上原知子の声に気持ちが躍ったのも、このころだった。

純な気分も胸騒ぎにしたのは、サザンオールスターズだった。そのアルバム、タイトルもじつに『Southern All Stars』（ビクターエンターテインメント、1990年）はカブトムシ二匹だけを写したモノトーン（正確にはアルバムタイトルの文字が色つき）のジャケットだった。カブトムシ、そのアルバムタイトルは、The Beatles のアルバム『THE BEATLES』（apple record、1968年）、そう、ホワイトアルバム（アルバムタイトルはエンボス）をおもわせた。ビートルズのなかでもジョージ・ハリソンはインドの楽器を好み、「Love You to」（『Revolver』parlophone、1966年）、「Within You Without You」（『SGT. Pepper's Lonely Hearts Club Band』parlophone、1967年）では、お気に入りのシタールの響きを鳴らし

¹⁾ 本稿は2015年度滋賀大学経済学部ワークショップ ReD の活動のひとつであり、2015年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究 C 「20世紀日本の感染症管理と生をめぐる文化研究」（JSPS 科研費 26370788、研究代表者石居人也）の成果である。

ReD は記録することをねちっこく再考します

ていた。大英帝国とインド、ビートルズとシタールは、ニッポンのトーキョと癒しの島オキナワ、サザンオールスターズと「ナチカサヌ恋歌」と重なった。桑田の意図や仕掛けは
どうでもいい。なんだそういうことだったのか、というところ。

6月 沖縄にとって6月は特別なときとなっている。6月には、「沖縄県慰霊の日」と定められた23日がある（1974年沖縄県条例第42号）。沖縄ではこの日、糸満市摩文仁の平和祈念公園で「沖縄全戦没者追悼式」が開催される。沖縄県はすでに5月19日付で、今年2015年の「戦後七〇年沖縄全戦没者追悼式の開催について」をそのホームページをとおして発表していた。だがそこには、なぜこの追悼式を6月23日におこなうのかの説明はなかった。

1945年のこの日が、沖縄に配備された第32軍の司令官牛島満が「自決」した日とされている。そうした日を追悼のときと選んだということは、戦場にいた軍人の自殺によって、沖縄戦で亡くなったすべてのひとの死を代表させているようにみえてしまうのである。それは適切なのか。

今年もまた「戦後70年沖縄全戦没者追悼式」がテレビで同時放送された（NHK総合、25分）。ただ、傍点をつけたとおり、今年は放送タイトルにも「戦後70年」の文言がついていた。「来賓挨拶」をおこなう内閣総理大臣がマイクのまえにたつあいだに、いくにんもによる「帰れ」などの怒号が伝わってきた。稀有なことだ。さぞご立腹のことだったろう。

6月にはまた、「ハンセン病を正しく理解する週間」がある。厚生労働省のホームページで閲覧できる文書「「ハンセン病を正しく理解する週間」の実施について」は、その趣旨を「ハンセン病に対する正しい知識の普及に努め、ハンセン病療養所入所者等の福祉の増進を図ることを目的に、六月二五日を含めた週の日曜日から土曜日までを標記週間として毎年実施してきたところである」と示している。だがそこには、なぜ6月25日が実施期間の軸となっているのかの説明はない。

この日は、「救癩」に慈愛をつくしたと仰ぎみられている貞明皇太后の誕生日で、かつては「癩予防デー」となっていた。6月25日とは、ハンセン病に罹った当事者の事蹟をひろく人びとの記憶にとどめて後世に伝えようとする記念日ではないのである。

イブツコンニュー

ReD は記録することをねちっこく再考します

今年 2015 年 6 月の新聞報道は、『朝日新聞』（大阪本社版）紙面をみたかぎりでは、6 月 22 日夕刊社会面 10 面に、「ハンセン病の追悼式典」の見出しで、6.8cm×4.3cm の小さな記事が載った（ハンセン病の追悼があり得るか？、沖縄戦の追悼とはいわない）。そこには、「厚労相は、「社会復帰や社会生活支援の取り組みをさらに強化していきます。歴史を二度と繰り返さないよう決意します」と述べた」と記されている。わずかな字数の記事とはいえ、「歴史を二度と繰り返さない」とは杜撰な表現だ。どういう歴史なのかが重要だろうに。ついで、同紙 6 月 24 日朝刊社会面 37 面には、「特別法廷で裁判／「被害の回復を」／ハンセン病元患者ら」の見出し記事が載った（4.7cm×4.3cm+5.7cm×8.6cm）。「療養所の入所者らが 23 日、要請書」を法相に手渡したとの報道で、その内容は「当時の特別法廷を検証し、人権被害の回復措置を取るよう求め」たもので、また「入所者らは、熊本県に残る旧医療刑務所支所の保存も求めた」という。

当事者 死者の追悼と知識の普及という、どちらも否定されにくい行事ではあるが、どちらとも日程設定の核心にはそれらの当事者の一方が脇におかれてしまっていると、わたしは感じる。ではいつが適切なのかとやり返されたら、それへの返答に口ごもってしまうところがある。

ハンセン病に罹った人びとにとどめず、彼ら彼女たちの家族やかかわりのあったひとたちもふくめて、その苦しさや痛み、なにかを達成したり獲得したりした喜びや感激、そうしたもろもろの生きられた歴史の象徴を、1 年のうちのどの 1 日に刻印すればよいのか。

わたしは、ひとつは、「らい予防法」が廃止されたその日が候補になるとおもう。だが、さきの「週間」の実施主体が、厚生労働省、各都道府県、社会福祉法人ふれあい福祉協会となっているのだから、それはむつかしいことなのだろう。理由はかんたんで、行政は政策の誤りをずっと反省しなければならなくなるから。それよりは、慈愛をありがたく讃えるほうがよほど気持ちよいということである。

他方で、「沖縄全戦没者追悼式」にもっともふさわしい開催日はいつとなるのだろうか。わたしは、降伏文書調印の 9 月 7 日がひとつの候補になるとおもうが、これだと、ずっと負けを自覚させられるようでいやだということなのか。ただしわたしたちがしっかりと自

イブツコンニュー

ReD は記録することをねちっこく再考します

覚しておくべきことは、どの日にするにせよ、「沖縄全戦没者追悼式」がおこなわれる「沖縄県慰霊の日」をいつとしたらよいのかは、沖縄全戦没者の総意によって決まるのではないという当然の事実である。それに照らせば、「ハンセン病を正しく理解する週間」をいつとするかの決定に、どれだけ当事者の意思がかかわっていたのか、ふまえられていたのか、は知らされず問われてもいないということ、「ハンセン病を正しく理解する」ための一項目としなくてはならない。

沖 縄 たんに6月が特別な月となっている共通性にとどまらず、ハンセン病をめぐって考えるべきことと沖縄のそれとが似ていると、わたしは感じている。^{ちになうしい}知念ウシの著述を読んで、そうおもった(『ウシがゆく—植民地主義を探検し、私をさがす旅』沖縄タイムス社、2010年、『^{知らんぷり}シランブナーの暴力—知念ウシ政治発言集』未来社、2013年。以下出典として略記するときは前者をウ、後者をシとしてページ数を数字のみ記す)。

わたしは、彼女の意思を『朝日新聞』記事(2012年5月15日)「沖縄と日本の40年 押しつけられ続ける「基地の島」(朝日新聞 DIGITAL)で初めて知った——「観光客をはじめ、みなさん、いい人ばかりですよ。日本にはこんなにいい人がいっぱいいるのに、なぜ沖縄から基地がなくなるのか、不思議でたまりません。みんな「沖縄が好きだ」って言う。でも、「そんなに沖縄が好きなら基地を持って帰って」と言ったら、黙ってしまう。あるいは怒ったり、逆にお説教したり」という文章が目にとまった。ここにいうお説教とは、「沖縄の人はそんなことを言っちゃいけない」とか、「自分が嫌な基地を本土に押しつけるのか」「同じ日本人なんだから敵対しないで」という内容で、それを聞いて彼女は、「沖縄は平和運動、平和学習をしに来る場所として固定化されているのでしょうか。もしかしたら、基地がある沖縄が面白いのかもしれない。エキゾチックで」と訝しがる。

ここでは、多数の安全や幸福が追求されたり確保されたりするために少数が犠牲になり、それだけでなく、こうした関係における少数者の異議申し立ては受けいれられず、多数のものたちはそうした事態を省みることをしないという、わたしたちが生きる社会の大元にあるようすがとらえてみせられている。対談記事での相手である高橋哲哉は、そこに原子力発電所をめぐらる問題を重ねて説いた(彼はそれを「犠牲のシステム」という)。わたしは

イブツコンニュー

ReD は記録することをねちっこく再考します

ハンセン病についてもおなじだとおもった。

新聞記事を読んだのちに、さきあげた著書の『ウシがゆく』をまず読み、ついで『シランフーナーの暴力』を読んだ。

植民地主義 知念は、最初の著書の副題に明示している「植民地主義」を一貫して議論している。「第二次世界大戦後、ほとんどの植民地が独立し、「植民地」という公的な制度は姿を消したことになる。しかし、独立後の旧植民地でも、実質的には植民地的な支配が続いていたり、植民者側でも被植民者側でも、人々の心に大きな影響が残っていたりしている。すなわち、植民地はまだ終わっていない」(ウ 3) のだから、植民地をめぐる「主義」、べつにいえば、その原理、本質、それにかかわる制度や態度、それについての喧伝や主張などをしっかりと考え論じようというのである。

沖縄における植民地主義は、「〇・六に七五」という数値によくあらわれている(2012年には74に。2015年6月23日の「戦後七〇年沖縄全戦没者追悼式」で沖縄県知事翁長雄志は「平和宣言」のなかでその数値を「73.8%」と示した。それは「米軍再編」や基地の「整備縮小」をもっても「0.7%縮小」にしかならないという文脈におかれた)。これは「沖縄で基地問題に関わる人ならおそらく誰でも口にしたことのある」いい方で、「日本国内に置かれている米軍基地の七五%が、国土面積のわずか〇・六%を占める沖縄に集中していること」を告発している(シ 47)。米軍基地が日本国内にある根拠は、いわゆる日米安保条約(このところ「日米同盟」ともいわれる「日本国とアメリカ合衆国との間の相互協定及び安全保障条約」1960年)の定めるところである。この偏りはあからさまな不均衡、不公平、不公正であり、それにもかかわらず、沖縄県以外の46都道府県で進んで米軍基地を受け入れる自治体はなく、かつ、日本国民は日米安保条約の廃棄にむけて国会を動かすことをほとんどしてこなかった。

また他方で、基地が集中するその沖縄においてすら、「無力な住民は強固な基地を揺るがすことはできない」という先入観が無意識のどこかにあつたり(ウ 116)、「沖縄人の利益はこれまでずっと、何かにつけ、日本とアメリカの利益の犠牲にされてきた。もうそれが当たり前、という発想すら内面化させられている沖縄人」がいたりする(ウ 48)。知念自

イブツコンニュー

ReD は記録することをねちっこく再考します

身も「沖縄に他の都道府県とちがって基地がたくさんあるのは、「沖縄だから当たり前」だと思っていた。「基地とは沖縄にあるものだ」と、受け入れていたのだ。そういう自分に気がつき、がくぜんとした」ことがあったと記している（ウ 99）。植民地主義がはたらくときの仕組みは狡猾にも、抑圧されるものたちの精神、思考、感性を従順になるように縛りあげるのである。

シランフナー　　なんだ、問題は基地とかそういった大状況なんじゃん、とかたづけようとする、狡知が仕込まれた仕組みに足をすくわれる。幼稚園の卒園式で歌われる「♪桜咲いたら一年生」という歌詞はどうか。「三月卒業式、四月入学式、桜」というのが日本におけるあるべきイメージであるのなら、日本であるはずの沖縄でそれが無いなんて疎外感をもつ——それが「沖縄の「日本復帰」後に学校生活を送った」知念の「実感」であり、「他のお母さんたちも同じなのだろう。ならば我が子には与えたい、というのも親の愛情なのだろう」との理解もみせる。ただ彼女は、「沖縄はいま、ブーゲンビリアやツツジ、イPPER、イタジイなんかきれいな季節だから」、そうした花々を模した飾りつけもしたい、この土地の季節にふさわしい歌詞にすればよいと考え、それを提案した。

だがそれは拒否された。その理由は、「入学式が桜というイメージは一般的なものになっていますから、変える必要はありません」ということだった。これを知念は「日本同化は沖縄ではもう一般的になっていますから、問う必要はありません」と言われたように感じ〔中略——引用者による。以下同〕気持ちが高ぶったまま、私は言った。「私は復帰直後にこの同じ幼稚園、小学校で教育を受けましたが、それは自分が生きている沖縄の現実を無視し、東京・ヤマトゥ中心の思考を植えつけ、疎外感をもたせるものでした。三〇年近くたって、自分の子どもたちまで同じ教育を受けさせるわけにはいきません」(シ 206-219)。

この記述について見出しの副題には、「植民地主義との小さなたたかい」の語句がみえる。

なんの歌だったか忘れたが、「桜の蕾もふくらんで、もうすぐ学校うれしいな」と歌った覚えがわたし（東京都生まれ）にもある。校門のところに桜が植えられていて、卒業アルバムには満開となったその写真がおおきく載っていた。学校と桜、その開花と3月下旬から4月上旬までころの季節のようすは、わたしたちの感性に染みこんでいる。これが、東

イブツコンニュー

ReD は記録することをねちっこく再考します

京都内の学校で、「ブーゲンビリアの花ひらき、もうすぐ学校うれしいな」と歌えと指導されたら、だれもが戸惑うにちがいない。そうであれば、沖縄で、またおそらく東北や北海道のいくつかの場所でも、桜と入園卒園、入学卒業の時期がずれることがあり、それに違和を感じることはとても自然なはずなのだ。

だが、それに気づきもしなくなり、違和感をあらわすものを押しとどめてしまう。それが「シラフナーの暴力」である。みぢかなところに目をやれば、毎朝お台場の天気がるまで全国のそれであるかのようにアナウンスしてしまうテレビという仕組みもおかしいものだ（しかもリポーターに、あやかちゃ〜ん、と呼びかけるのは、仕事中文のだからこれまたおかしいはず。女子（！）をちゃんづけで呼ぶことに、女性自身も違和を感じずそれでよしとしている）。こうした異議をおさめる決まり文句が、そうことを荒立てずに、まあ目くじらを立てなくても、である。

連 繫 念のために示しておく、知念の議論は奇矯な突然変異なのではない。東京の呑気なジャーナリスト（タカ派とのこと。三大紙のひとつに所属と推測）が彼女に「あなたみたいなことをいう沖縄の人には初めて会ったよ」といったとき²⁾、知念は「私がいつていることなんて、みんな裏でいってますよ。ただ表でいわないだけ」と切り返したとのことだし（ウ 59）、著書では、大田昌秀（たとえば、『醜い日本人—日本人の沖縄意識』サイマル出版〔サイマル双書〕1969年）や目取真俊^{めどるましゅん}（たとえば、『沖縄「戦後」ゼロ年』日本放送出版協会〔生活人新書〕2005年）の議論が参照され、そのいくつかの論点に同意し、そのいくつかを批評している（シ 149-152、ウ 75-81）。

ここで議論のつながりをたどってみたのは、なにも、知念の主張や思想の系譜を確かめたかったからではないし、彼女の背後にいる歴大な数の賛同者を想定してその議論の確かさをいいたてたかったからでもない。

彼女は、「たとえ無礼だと思われても、後輩には先輩たちに質問する義務があると思う。私より下の後輩たちに対しては、それが私の世代の責任でもある。／先輩を問うとは、自分もいつか問われるという意味である。それはちょっとこわい、緊張することだ。しかし、

²⁾ 「タカ派」は知念、「呑気な」は阿部による形容。

ReD は記録することをねちっこく再考します

そのときはそのとき。誠実に自分を振り返れたらいい。そういう覚悟を多少なりとももつと（シ 150）、自分がとる姿勢をみせている。これは他を尊重し、自己に応分の責を課すというきちんとした態度だとおもう。

あるシンポジウムで知念が「沖縄の自己決定権の主体は沖縄人でなくてはならない」とうったえたところ、フロアから「そんなことは三〇年前にわかっている。知りたいのは、そのつぎの議論だ」といわれて、「だったら、どうして、それを私たちの目の前に置いてはくれなかったのか」とおもったという——「日本復帰」直後の沖縄社会で育てられ、「日本人になりたくて」ヤマトウに行き、そういう自分とは何かを考え出し、ひとりで「自分とつながり自分を表現する言葉を探し」、「同じことを求める同世代の沖縄人の仲間と出会」い、「そうやって、「沖縄人」という主体を発見し、そういう自分を育ててきた」と自己の軌跡を確かめる彼女にとって、さきのフロア発言には「それが「三〇年前にわかってい」たことなら、なぜ、私や仲間たちが孤独のうちに作業をしなければならなかったのか。なぜ、私たちがそんなことをしないでもいいように、私たちの目の前、すぐに手の届くところに、それを置いてはくれなかったのか」（シ 80）と疼いてきたかのような思いを発した彼女の応答は、正当である。

してきたものとして 知念は自己のうちに堆積したもろもろをきちんと跡づけようとして、「一皮一皮剥ぐように語って」いる。ただし、ここに引用した形容の語句は、彼女自身の行為についての喩えなのではなく、「植民者」に対してのそれだった——「植民者自ら、自分がいかに植民者であるか、どのようにそうなったのかを一皮一皮剥ぐように語ってほしい。そうするとき、被植民者は安心して自分のことや自己の共犯性、複雑性を語れる。そこから脱植民地化の過程を共に始められるのではないか」と（ウ 108）。

「植民地主義」という暴力をめぐる知念は、されてきたものたちと、してきたものたちとを、分けけて議論をたてている。ただし、沖縄の人びとを前者に固定するような決めつけはない。たとえば米軍基地をめぐる「県外移設」をとるなるとき、その候補地にフィリピンであれグアムであれハワイをあげるとしたら、それはまたそこにもともと暮らし生きてきた人びとへの抑圧となってしまうから。しかも日米軍事同盟のもととなる条約

イブツコンニュウ

ReD は記録することをねちっこく再考します

と日米地位協定では米軍基地は「日本国内」におけるようになっている。そうであれば、負担軽減のために基地を国外に移設することはあり得ず、そのためには本土または日本へ基地を移転するか、条約そのものの廃棄を選ぶこととなる。日本における米軍基地の不平等を解消するためには、基地のおよそ4分の3もある沖縄県と4分の1しかないほかの46都道府県とがあるとき、後者こそがその方途を語らなければならないのである。

こうした不平等の解消をうったえる声に対して、不平等や不均衡の課題は基地問題をめぐってのみあるわけではない、沖縄県以外の46都道府県のそれぞれにもそれらのところに過度に集中する不平等や不均衡がある（たとえば豪雪。ウ85）、といったとしても、米軍基地をめぐる不均衡をほんの少しでも相殺できない弁明にも弁解にも言い訳すらにもならない。男社会で女をめぐる不平等や不均衡の改善をもとめるうったえに、出自や門地を根拠とする差別だって依然としてある、性別だけの強調は不当だと切り返しても、（そしてこうした反論のようなものはおうおうにして男が主張する）、それは考えることをやめているとみずから表明しているにすぎなくなる。あれもあるこれもあるといい募るよりも、あれにはこうする、これにはああしているとその手立てを示す方がよい。

では、米軍基地をめぐる、さらには植民地主義に対して、なにをすればよいのか。これについても彼女からの提言がある——「「どうせ何もできない」と何もしないことは世の中を確実に悪くする。実は私たちはそのくらい大きな力を持っている。「何もしないこと」をちょっとやめれば社会の悪化を少し止められる」（ウ12。たとえば、戦争に反対するための、より具体の行為については、『ウシがゆく』からのさきの引用部分原文のつぎのページに列挙されている）と呼びかけ、さらには、「沖縄への不平等を行使している自分自身から脱するために、まず、沖縄に集中させている日本の米軍基地を引き受けるべきではないか。そういう議論を日本人は日本各地で起こすべきではないのか」（ウ45-46）とつめ寄っているのである。

ここに記された「日本人」の語に強い違和を感じるひとがいるかもしれない。知念は「8・13」という区切りに留意している。それは「二〇〇四年の沖縄国際大学への米軍ヘリ墜落炎上事件」の日付である。「8・13で沖縄は日本でないことがはっきりしたので、もうヤマ

イブツコンニュウ

ReD は記録することをねちっこく再考します

トとは呼ばず、日本のことは日本と呼ぶことにする」との決意が示され、8・13を「経験した今、これを書きながら、私はあらためて、日本の人は日本を変えてほしいと強く思う」と要求しているのである（ウ 43）。ゆえあつての「日本」「日本人」との呼称である。米軍基地をめぐる不平等を知った、沖縄県以外の46都道府県に住むわたしたちは、沖縄から「日本人」と名指しされるものとして、あらためて自分自身を省みて、それを話し、わたしたちがしなくてはならないことを確かめ、それを実行する必要があるのだ。（なお、知念は、さきにあげた目取真の著書の特徴を「沖縄（人）、日本（人）という区別が当然のものとして使われていること」と指摘している）

こうした関係状況もひるがえってみれば、ハンセン病をめぐるようすにもあてはまる。しかも、英語の colony には、病をめぐる隔離施設、隔離地区、隔離されたひと、の意味もあった。してきたものとしてのわたしたちがまず、語るべきなのだ。

自己を語る 知念は、「植民者が自己を植民者であると認識することによって、被植民者は安全を確保でき、議論のスペースが成立する」ともとめる（ウ 108）。この切実な要望をまえにして、本土に暮らす日本人であるわたしはたじろいでしまう。くりかえせばこの引用文のすぐあとで、さきに参照した「植民者自ら、自分がいかに植民者であるか、どのようにそうなったのかを一度一度剥ぐように語ってほしい」とも強く請われていたからだ。たとえばすでにみたとおり、戦争に反対するために、まずは「マスコミに意見を伝える」とか「ビラを作って、配る」とか（ウ 13）、そうしてみればよいことはすぐにわかる。だが、自分（たち）がだれかの——という、どこか、みえない、遠くの世界のことをめぐる事態が想定されているようになってしまう、そうではなく、沖縄の彼ら彼女たちの、とここでは書かなくてはならない——自分（たち）が沖縄の彼ら彼女たちに、米軍基地をめぐる不公平を押しつけていると知ったとき、わたし（たち）みずから、わたし（たち）がいかにそうした押しつけているものとなっているのか、どのようにしてそうなったのかを語ることはむつかしいのだ。気づかなかった、知らなかったといっても（第2の著書は初め「無知という暴力」との書名だったという）、また、知っていてもどうしてよいかわからなかったといっても（それこそが「シランフナーの暴力」）、それでは事態はなにも革まらず懺
イブツコンニュー

ReD は記録することをねちっこく再考します

悔にすらならない。

どれほどわたし（たち）が不公平を押しつけるものであるか——それは無知、無関心に始まり無力感にとらわれ、それらに泥むことによって得られる安逸と快適さを貪り、他方でそれによって苦しむものが確実にいても、無力感にとらわれ、無知と無関心に逃げこんでしまう。そうなった経緯をたどろうとしても、やはり、それは無知、無関心に始まり無力感にとらわれ……、と示してみせても、それではなにもいわないに等しいか、ただの懺悔に終わってしまう。だからこそ、一皮一皮剥ぐように、というきついレトリックを用いてもとめざるを得ないほどに事態は厳しく、酷いのである。

不公正を押しつけているにもかかわらず——、不公正を押しつけているものでありながら——、自己を語るに口籠ってしまうとき、もういちど、知念が開いた議論の場を確かめておこう。彼女はなにを告白し、そして告発したのか。

傷 してきたものと、されてきたものとがいて、なにより前者がまず自己を話さなくてはならないというとき、それは、してきたものが傷害を負わせたもので、されてきたものが傷害を負ったものだから、という区分を知念はしていない。「重要なのは、日本人が、沖縄への差別をやめ、平等を実現すると決意して、まず沖縄から基地を持ち帰り平等負担をすることを安保賛成派（無関心層を含む）、反対派、に働きかけることだ。沖縄人との平等を自己にも他の日本人にも突きつけるのだ」（シ 40）というとき、あわせて彼女は、「激しく反発されるだろうが、そのやりとりを通して、他者を犠牲にして成り立ってきた日本人というあり方がくっきりと、同時にそれによって深く傷つき歪んでいる自分自身の姿も見えてくるだろう」と診断しているのである。米軍基地を沖縄に押しつけているものたちが、自己を省みるとき、みずからの歪みと傷に気づくと説かれている。

傷ついているのはわたしたちだけではない、あなたたちもまた傷を負っているのだと、されてきたものがしてきたものに言葉をかけるとき、これをやさしさだとか思いやりだとかいって、ありがたがったり讃えたりしては、事態を見誤る。してきたものたちはその所為が無自覚なままに、身勝手にも、米軍基地が集中するその地を憩いのリゾート地や癒しの島に指定して、実際に大挙して押しかけているのだから。知念はいう——「その傷を治

イブツコンニュー

ReD は記録することをねちっこく再考します

すには、沖縄などの他者に癒されようとしてはならない」(シ 40)。なにをしなければならぬのか——「好むと好まざるとにかかわらず、自覚的か無自覚的にかにかかわらず、自分に社会化されてしまっている、そのような生き方をやめる決意をし、実行するしかない。なぜそうするのか——「自分を社会化した社会に働きかけ責任をとることで、社会的存在としての自己を解放できる」から。

「沖縄に移住すること」を拒む(ウ 58)、「もう沖縄は自立したほうがいい」との勧めには、それは「沖縄の私たちが決めます」と応じる(ウ 60)、「「沖縄はよくやってきた」という言葉」に困惑する(シ 111)、「野心的な〔在沖の〕日本人作家の足場にされている」「私たちの苦しみや悲しみ」に気づかされてさらに涙する(シ 119-120)——憩いや癒しだけでなく共感も共闘も、それらの根元に、してきたものたち、植民者たち、コロンたちの傷があると診て、しかし、だからといって沖縄にすり寄るなどの注意書きが、本書の随所に書きこまれているのである。

知念は、さきにふれた目取真の著書に拠って「傷」から問うている。問いの始まりが「傷」なのだ——「目取真は沖縄戦を振り返る。なぜか。ただ単に、「自分が生きている社会の問題を考えれば、必然的に戦争のことを考えなければいけない」からである。沖縄に生まれ沖縄に生きる彼の前には、軍事基地があり、それに傷つけられる人々が、ここ沖縄に、そして、軍用機の飛んでいく先(例えば朝鮮半島、ベトナム、イラク、アフガニスタン)にいる。傷を抱える人々がいるのだ。すぐそばにも、海の向こうにも。そうであれば、考えざるを得ない。この傷をもたらすものは何か。傷つけられた人々がさらに他の人を傷つけてしまうことになるのはなぜか。なぜ、それが起こるのか」(ウ 76。傍点は引用者)。

ここには傷がいくつもの組みとなってつながってゆく怖れを看取する感性がある。ひとは幾重にも傷つき、傷が他を害し、傷が伝わるのである。彼女は、「少数者同士が対立させられる構図なのだと実感した」体験を記している(ウ 110。詳細は同ページを熟読のこと)。

この指摘をふまえて考えてみればまた、たとえば、生物多様性を根拠として、そのゆたかさを棄損したり破壊したりする恐れのある原子力発電所や米軍基地の建設に反対するとき、設置そのものを無化せずに代替地を探そうとするなかで、ゆたかさとは対照にあると

イブツコンニュー

ReD は記録することをねちっこく再考します

ころを候補地にあげるとすると、貧しい環境で、それでもそこに生きる少数の脆弱な人びとの生を脅かすことになりはしないかと、わたしは怖れる。だから、知念のいう「構図」をきちんととらえることが必要となる。

おそらく現代世界には、といういい方は許されるかもしれない、と前置きしていうと、おそらく現代世界には、傷が組み (composition) となっている事態がある。ならば、傷の道理を弁えよ、とわたしは知念から教わった気がする。

提案 「植民者の脱植民地化」=「植民者をやめるために」との課題についての知念の提案はとても明快だ (シ 95-96)。米軍基地をめぐるのは、「まず、自分たちが基地を押しつけていることに気がつかなければならない」、そして「沖縄から基地を引き取る」こと。彼女はまたこうもいう——「日本人の植民地主義をやめさせることができるのは、日本人だけだ。日本人はなによりもみずからの脱植民者化に取り組まなくてはならない。沖縄に移住したり、被植民者の共同体に入り込み、その脱植民地化の試みを「応援」「指導」しようとしてはならない」。沖縄に移住したがったり、沖縄が好きだといったり、沖縄への愛着を露わにする日本人は、「自分の良心の痛みを癒すことを目的とする逃避主義者ではないか」とマルコム X にならって知念はうたっている。「大好き、愛している」と自分の感情をあからさまにする「やさしさ」が問われる (ウ 238-241)。沖縄を対象にするこの感情告白は、韓国にもむけられている (そしてハンセン病療養所やその在園者にも)。

これをテーマにした討論会での、「僕は知らない人のことは愛せない。愛するとはもっと個別具体的なことだ」「何かを集合的に愛する、と人がいうとき、実はその対象については何も語っておらず、むしろ、自分自身について語っているのではないか」といった発言が紹介される。後者のようすは、愛の対象が個であってもあてはまり、わたしはハンセン病の療養所に暮らす人びとが創った詩や短歌などの作品への讃辞も、じつにそのとおりだとおもう。「それを愛せるぐらい自分はいいい人だ」(ウ 239) ということだ。

知念は「ラブ」と「リスペクト」とを対置する。なぜ「尊敬」ではないのか。その語には「崇拜」など特別な語感があるから、いい換えたとのこと。「もっと日常的ですべてに通底する「尊重」や「敬意」も含んで考えたいからだ」ともいう。「相手に対してどう

イブツコンニュウ

ReD は記録することをねちっこく再考します

いう第一印象を持ってもいい。苦手だと思ってもいい。必ずしも好きになったり、すごいと思ったりしないでもいい。しかし、その次の反応として、最低限、その人にはその人の背景、物語があることを尊重し、自分とのかかわりを考えることだ」と、思索の方向が示された。

ストーカー行為　ここで、療養所ストーカー、などという表現を用いると多くのお叱りをうけることとなろうとの予感がある。ただわたしはこの語を、知念の本で紹介された「沖縄ストーカー」（シ 95）から借用して使ってみた。ストーカーについての、「特定の個人に異常なほど関心を持ち、しつこく跡を追いつける人」（『広辞苑』第 6 版）との説明にならって、特定の場所にとっても強い関心を持ち、そこを不特定多数人びとがひっきりなしに訪ねること、をもストーカー行為と呼んでみよう。これは TDS や USJ へのリピーターとは違う。悪意のない行為であること、しかし、相手のようすを慮らないこと、そしてたいていは静かに寄ってゆく、その跡をたどろうとする、歩きまわる、かならずしも同一人物や同一集団ではないが、訪問者があとをたたないようすを、わたしは stalk だとみなした。行為者がリピーターとなることもあろうが、不特定多数のものが引きも切らずにと喻えたくなるほどに訪れるから、なおのこと療養所ストーカーは厄介だとおもう。

療養所の外から、いま療養所へ出かけようとの呼びかけがおこる（たとえば、『朝日新聞』2014年7月24日朝刊オピニオン欄「記者有論」）。「国の隔離政策の下、どんな人権侵害を受け、どう生き抜いたか、彼ら〔療養所に暮らす人たち〕が直接、語るができなくなる日はそう遠くない」ことは確かだ。「入所者自身、そうした危機感を抱き、自らの記憶を「負の遺産」として語り継ごうと、懸命だ」（下線は引用者による）というとき、下線部以外の箇所には同意もできる。「こうした資料館の整備やガイドの養成は急務だが〔国立療養所栗生楽泉園と同長島愛生園の事例を指す〕、当事者の「生の証言」に勝るものはないだろう。残された時間は少ない。いま行かなければ、会えない人がいる。聞けない話がある。未来を生きる若い人たちに出かけてほしい」というわけだ。

だがときに、療養所によっては、自治体、学校、人権団体、経済団体などによる施設見

ReD は記録することをねちっこく再考します

学が 1 週間に 250 名ちかくなるばあいがある³⁾。研修、教育、視察の場として療養所が重宝されているのである。それ以外にも、ボランティアや宗教の団体や個人が、個別に在園者を訪ねることがある。訪う方はそのときかぎりとなるかもしれないが、受ける側はたいてい福祉課や自治会や特定の個人が対応することとなる。そうした場に、療養所の現状や将来をおもえば、「残された時間は少ない。いま行かなければ、会えない人がいる。聞けない話がある」から、出かけてみよというのだ。「こうした資料館の整備やガイドの養成は急務だが」と記者がいうのであれば、それを記者は知っているというのならば、逆接の接続詞でかたづけずに、その整備と養成の速やかな実現をもっとうたえれば、もっともっと記者がうたえつづけければよい。紙面にあげられた 2 つの療養所は、ほかにくらべれば受け入れ態勢が整っているのである。それがあるところとないところでは大違いなのだ。

安直と横暴 「当事者の「生の証言」に勝るものはないだろう」といってしまうことは容易い。いって聞いて、みて聞いて、それで済ませる一方で、療養所にゆくまえに図書館などで調べて分かることがたくさんたくさんあるのに、そうした面倒な作業は疎んじられて疎かになる。あるいは、かぎられた特定の個人に会ったり、作品が多くあってしかも賞をとったひとへの関心と賞讃はあつまったりするが、それ以外の在園者には見向きもしないようすがある。いまいる在園者、いま評価される在園者に目や耳がむいても、過去のようにすはといえば「負」のひとことかたづけられたり、悲惨な歴史といっってそれでわかった気になったりもする。療養所に出かけて、いまいる「当事者の「生の証言」」を聞いて、差別と抑圧の加害も免罪されたかのようである。

知らないことを知れてよかった、という厩大な量の感想文が残るだろう。「歴史を二度と繰り返さないよう決意」すれば、自分はおなじ被害にあわないし、自分の子どもや孫たちもそうした苦しみを知らずに楽しく暮らせるのだろう。もうどうにもとり戻しようのない当事者の「人生被害」は蚊帳の外におかれずに済むのだろうか。

療養所の外で生きてきたものたちはまず、自分の居場所でできることをして、そこから

³⁾ 阿部安成「療養所歴史を縁どる一過去との乱取り」(32) (『青松』通巻第 678 号、2014 年 10 月) を参照。

ReD は記録することをねちっこく再考します

の環境整備を広げていった方がよい。「入所者自身、そうした危機感を抱き、自らの記憶を〔中略〕語り継ごうと、懸命」であるとき、それを聞く用意をきちんと整える必要がある。「いま行かなければ、会えない人がいる。聞けない話がある」からといって、彼ら彼女たちには訪問者に会ったり話したりする義務はない。「いま行かなければ、会えない人がいる。聞けない話がある」のだから、会え、話せとなってしまうと、これは拷問にほかならない。しかも、当事者に語り継いでほしいという切望があったとしても、語ることに痛みや悔いや悲しみがともなうかもしれないと、非当事者は想像できないのだろうか。もちろん当事者の感情はもっと多様で、楽しかったことうれしかったこと、感激や感謝などいろいろなたくさんがあったことも確かだろう。そうしたもろもろのひとの生きた軌跡を聞くきちんとした用意がないままに、ともかく、まずは、「いま行かなければ、会えない人がいる。聞けない話がある」から療養所へ出かけよう、と呼びかけることは、ずいぶんと無責任のようを感じる。責任は？と問うのは、きちんと応答できるのかと尋ねているのである。

そして、訪うものは聞き、暮らすものは話す、という役割を固定してしまうと、訪うものは聞いて考えて話すことをしないで済んでしまい、また、暮らすものの話を経典のように固定してしまうことにつながる。また、その逆であっても、訪うものが話しかけるだけではそれは乱暴な布教とおなじで、教え導くものと教わり導かれるものとに分割していることとなってしまうから要注意である。

違い ここではたと気づく。沖縄とハンセン病をめぐる事態が似ているとおもってきたのだが、それぞれに事態にむきあう知念とわたしとは身の上がまるで異なるのだ。事に当たるようすが違うといってもよい。彼女は沖縄で暮らし沖縄について考え書くむぬかちゃー（ライター）で、わたしは療養所に暮らさず（1回の滞在は長くて1週間）、ハンセン病に罹ったことはなく、当事者ではなかった。法律による隔離予防体制を変更しようと努めなかったすべての非ハンセン病発症者には、自覚の有無にかかわらず、その不作為に応じる責がある。そのかぎりでもわたしも責を負うものとなるが、それが療養所を調査と研究のフィールドとするのだと掲げるだけでかんたんに果たされるとは考えていない。

療養所での、また、療養所をめぐるわたしの仕事は3つある——(1)療養所に残る過去の
イブツコンニュー

ReD は記録することをねちっこく再考します

痕跡を整えてゆくこと、(2)療養所のようすと療養者の生 (life、また lives) とを記録すること、(3)療養所とそこに生きる療養者にかかわる外部者のようすを記録すること。

(1)については、史料目録をつくったり、史料のリプリント版を刊行したりすることをわたしの業務としてきた。これまでに国立療養所大島青松園のキリスト教霊交会教会堂図書室に残る蔵書目録を始めとしてずいぶんとたくさんの目録をつくり、それを WEB 上でも発信してきた⁴⁾。史料のリプリント版はすでに、国立療養所大島青松園に残る逐次刊行物を 3 タイトル、香川県の大島と沖縄県の屋我地島などに生きた療養者の著書という書籍の初版と復刊版を刊行している⁵⁾。これは時間と資金さえあればたいのひとにできる、そうたいした仕事ではない。しかもこの成果の利用はおもに部外者の調査者か研究者となるだろう。成果物の活用が療養所とそこに生きた療養者を知ることにつながる可能性があるとはいえ、目録もリプリント版も部外者による部外者のための成果となりかねない。

ただこの作業をとおして、在園者との「歴史意識 (過去に向かうところ) の共振」⁶⁾ ともいうべきようすがあらわれ、それはわたしにとって貴重な体験となった。

(2)と(3)についても、いろいろと書いてきた⁷⁾。国立療養所大島青松園もその 1 つの展示会場となった瀬戸内国際芸術祭 2010 と同 2013 や、国立ハンセン病資料館の企画展示や、療養所在園者を取りあげたドキュメンタリフィルムについての批評は、療養所と療養者を知るためというよりも、そこと彼ら彼女たちをとりまくわたしたちがなにをしているのかを明らかにするための作業だったとおもう。もう 1 つ、「療養所のようすと療養者の生とを

4) 阿部安成「国立療養所大島青松園キリスト教霊交会蔵書について—香川県大島の療養所を場とした知の蓄積と発信」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.107、2009年3月)など。

5) 阿部安成監修、解説リプリント国立療養所大島青松園史料シリーズ(近現代資料刊行会)の1が『報知大島』(2012年刊)、2が『藻汐草』(2014年刊)、3が『霊交』(2014年刊)、阿部、石居人也監修、解説リプリント・ハンセン病療養所シリーズ(同前)の1が『選ばれた島』(2015年刊)。両シリーズとも刊行継続中。

6) 2013年11月2日の「公益財団法人福武財団設立一周年記念研究助成・活動助成シンポジウム」におけるわたし自身の研究についてのわたしの発言(なお「過去に向かうところ」は『歴史学研究』の特集名を借用した)。このシンポジウムについての稿を準備中。

7) それぞれの最新成果は、前者が阿部安成『透過する隔離—療養所での生をめぐる批評の在処』(滋賀大学経済学部、2014年)、後者が同『島で—ハンセン病療養所の百年』(サンライズ出版、2015年)。

ReD は記録することをねちっこく再考します

記録する」にあたって、そうした記録をおこなうわたしの仕事のようにやわたしの構えもともに、そこに記録しようと努めてきた。ただ、いまふりかえると、わたし自身を問う度合いは弱かったとおもう。

わたしを問う、「私をさがす」とは、いったいなにを、どうすることなのだろうか。

傷とは？ 知念はくりかえし書きとめた「傷」という語で、なにをあらわし、なにを話そうとしたのか？。彼女の言葉を1つひとつとりあげてみよう。

「あのだるい、いやな気分を覚えておこう。自分の痛さを認識し、他人の痛さを想像できるように」(ウ 21) —— 「女性差別」をめぐって、「自分の怒りを抑圧せず、冷静に表現できたし、抗議もした」そのあとでのこと。

「そしていつもアメリカ人のように話せないことを引け目に感じていた」(ウ 29) —— だが「ウチナーグチで大演説してやろう」と身構えるが(ウ 30)、それもできず、「くやしい」思いをする。だがその後、「沖縄語で講演に初挑戦する」(ウ 125)。

「日常生活を送っていくために、征服者に対する、己の身を滅ぼすほどの怒りとどう折り合いをつければいいのか。そのようにしたら怒りを「克服」できるのか」(ウ 198) —— 「アメリカ・インディアンで五十代後半になる女性の、プレシラ・リビングストンさん〔中略〕と私〔知念〕はある夕方、図書館の片隅で、日が暮れ、互いの顔もよく見えなくなるまで話しこんだ」ときのこと。

「それは、自分の中の日本人が感じ取った沖縄人の怒り、というものが、ただの想像上のものではなく、沖縄人自身がずっと抑圧し隠してきたものであり、いったんその封印が解かれると、自分でも手に負えないものとして爆発し、どうなるかわからない、という恐れである」(ウ 211) —— 2008年3月23日「米兵によるあらゆる事件・事故に抗議する県民大会」で知念が感じた「「沖縄人の怨念」を内なる日本人が恐怖する」ことをめぐって。

「あの支配的な構造のなかで、生来の自分として伸び伸びしてられない、つねに脅かされているという感覚をわたしはもっています。〔中略〕わたしは、構造にのみ込まれないような精神的したたかさが自分に足りないことを痛感せざるをえません。それが足りないために、構造の渦の中に落ち、それが内在化された劣等感の虜になってしまうことがある

イブツコンニュー

ReD は記録することをねちっこく再考します

のです」(シ 171) ——沖縄と日本をめぐる「政治・経済・文化的に両者が決して対等ではない、歴史的にも圧倒的に支配的な構造からもたらされ」た「劣勢意識」をめぐる。

「構造」とは、たとえば、仕組み、という語とくらべると、とても固く重たい感じがする語だ。だれかに作られたのでも、わたしがこさえたのでもなく、おそらくそれなりに時間をかけて、少数ではなく多数の意思を、綿密に、精緻に造形した絡繰^{からくり}なのである。それが駆動するとき知念は、「私は私であるはずなのに、私をのみこもうとする大きな力がある」(ウ 4) と感じている。その力が彼女に傷をつける。傷が治ったとしても痕が残る。理不尽な力がつけた傷や傷痕が、「あのだるい、いやな気分」「引け目」「劣等感」となってここに染みつき、また「己の身を滅ぼすほどの怒り」の滾^{たぎ}りを感じたときには傷がまだ癒えていないことを痛感するのかもしれない。「私は、もう一つの「沖縄人の恐怖」にも気づく。／それは、自分の中の日本人が感じ取った沖縄人の怒り、というものが、ただの想像上のものではなく、沖縄人自身がずっと抑圧し隠してきたものであり、いったんその封印が解かれると、自分でも手に負えないものとして爆発し、どうなるかわからない、という恐れである」と知念が書くと、そこには目取真にもつうじる怒りの診断があると、わたしは感じる(目取真俊「希望」『朝日新聞』1999年6月26日夕刊10面)。

怒り 知念と話しこんだプレシラさんは、「どのようにしたら怒りを「克服」できるのか」との彼女の問いに対して、「私は『克服』なんかしていない」と応じた(ウ 198)。プレシラさんは、「こんな状況を毎日見せつけられるのだから、怒るのは当然」「あなたは〔知念は〕怒っている。なぜならあなたは正しいから。怒りがエンジン。怒りがあなたを動かす。怒りがエネルギーを生む。怒りで前へ進んでいける」ともいった。肯定、受容、包容、そして抱擁も治癒へのきっかけとなるだろう。

ここで、のむ、という日本語をみよう。『広辞苑』(第6版)はじつに多様なその語の意味を報せている。①「口に入れて嘔まずに食道の方に送りこむ」、②「吸い込む」、③「こらえておもてに出さない」、④「圧倒する。また、見くびる」、⑤「うけいれる」、⑥「姿を包み込んで見えなくする」、⑦「収める。隠し持つ」、⑧「呑行為をする」、⑨「謡曲の特殊な発音法」というぐあいだ。

イブツコンニュー

ReD は記録することをねちっこく再考します

知念が議論する「怒り」には、この、のむ、という動詞がみあうようにおもう。怒りをのむ——怒りをこらえてそれをおもてにださない、怒りを圧倒する、飼い慣らす、またときに、それにのまれてしまい、怒りのままにふるまうこともある、怒りを内にのみこんでしまえば、外からは他者からは怒りがみえなくなる、懐に短剣をのむように怒りを密かに抱いていることもあるだろう。

「琉球処分」以来の歴史が、沖縄戦の記憶が、米軍基地集中の現状が、日々の暮らして怒りをのんでいる人びとをつくりだしている。否定、破壊、圧迫が「今やそれは私たちの生活、身体感覚にまで染み込まされている」（ウ 204）と感じさせている。だが、「体内深く入った異物、それを完全に取去ろうとすると血が流れる」、しかし、「そのままでは健康を害し、ゆっくりとあるいは突如として死に至らしめられる」、そうしたときに知念は、「私が今ほしいのは、そんなさまざまな立場の沖縄人がそれぞれの複雑な苦悩、悲しみ、怒りを語り、共有することが保障される安全な小さな空間、小さな集会だ」と望む。「特に一九九五年以来、どんな現実を見、見せられ、それにどう対応してきたか、すなわち、怒ったり、あきらめたり、ごまかしたり、後悔したり、屈辱を感じたり、それでも譲れないと思ったり……。そんな気持ちを話し合い、分断させられることの多い沖縄人同士がつながり直す場がほしいのだ」（ウ 204）とうったえる。

ここにいう 1995 年とはいうと、そのときに起こった出来事として、日本では阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件が覚えられていて、沖縄での米兵による少女暴行についてはおおかた忘れられている。さきの目取真の短編「希望」は、この米兵による暴虐がなければ、書かれはしなかつただろう。

知念が望む「小さな空間、小さな集会」は、彼女たち彼らの怒りをのむ場でもある。

癒 辞書を引けば「癒」には、「いやす。なおす」と「やむ。病気にかかる。悩む」の意味があると知る（『新漢語林』）。治癒とは、^{なお}治し^{いや}癒すことでもあり、病や悩みを癒し治すことでもあるのだろう。

知念はダラムサラーであうひとに「植民地状況にある〔中略〕そういう苦悩のなか精神の均衡を保つにはどうしたらよいか」尋ねたいと面会を望む手紙を書いたという（ウ 69）。

イブツコンニュー

ReD は記録することをねちっこく再考します

「外」の「主流」の「正しいもの」に自分を合わせ（ウ3）ようとしてきた、させられてきた、みずからそうしてきた。「外にある物差しで自分（たち）が位置づけられるのを「内面化」して」きたのだ（ウ189）。彼女はそれを「自己疎外」と呼ぶ。自分が、自分であるはずなのに、自分がなにか、どこか、よそよそしくなるようすである。それは「チムワサーする（心落ち着かない）」（ウ3）自分を生きることとなる。

私たちが疎外から脱するには、自らを疎外するものの中に入っていく、一つでも多く自分の居場所を見つけようとする事なのか。そのために、それに合わせて自分を変えていく事なのか。逆に、ありのままの私を認めろ、と徹底的に迫っていく事なのか。

あるいは、私たちが疎外するものの正体を見極め、そこから離れ、自分を実感できる世界を自分で構築することなのか。

と彼女は問う（ウ189-190）。そうやって自分のなかを満たしているもの、そこに欠けているものを見抜くために「自己の内側をたっぷり見つめて過ごし」ている（ウ124）。それは、「自分が何者かを知り、自己の尊厳を守るすべを持つ者は、安定した精神状態で学べ、より才能を発揮していけるだろう」（ウ244）と展望するからだ。

いやなこと、抑圧、差別、そして「植民地主義」——こうした事態に直面したときの心情をめぐって彼女は、「怖い」と「気持ち悪〜い」とを峻別する（ウ229〜232）。

「怖い」と思うと、身がすくんで動けなくなり、力が奪われる。「どうせ、かなわない」という無力感に支配されやすい。そうすると、勝てるかもしれないことにも負けてしまう。一方「気持ち悪〜い」というのは、自分の不快さを述べているが、対象と距離を置き、状況にとりこまれていない感じだ。力を自分で保ち、逆転の機会もうかがう。その抑圧自体をからかい、抑圧の「権威」を否定する。

と説き、「そうすると、これまで恐怖や無力、憂鬱を感じさせられてきたことを、／「気持ち悪〜い」／と、とらえなおしてみることで、自分の力を取り戻し、抵抗できるやり方を見いだせるかもしれない」と期待する。もとより全面突破、全面解決にいたらないかもしれないが、「怖い」を「ハゴ〜」ととらえなおすこと自体がまず、自分の力をとりもどす一つだと気がついた。侮辱され、力を失い、抵抗できずに、自己嫌悪と同胞不信で気がめ

イブツコンニュー

ReD は記録することをねちっこく再考します

「いっている感じは薄くなってきた」との改善はあったのだ（「ハゴーサヨー」は「Disgusting!」とのこと）。自身を「恐怖」から、いくらか抜きだしたというところだろう。これを、嫌悪、という言葉がきついだろうか。むかつく～、といっても攻撃性がまだ籠るだろうか。おえっ、がよいか。おえ～の効能だ。

「精神の均衡」「安定した精神」を渴望するものがある。

内 観 わたしはさきに刊行した自著で、ハンセン病療養所に生きるひとりの療養者の生を考えると「内観」という語を使ってみた。1909年以降の日本国で、この病を発症したものは、自己を隔離し、療養所に自己を閉ざすと自覚し、その外に生きる自己を否定して、その閉ざされた場所でみずからを生きた。だがその療養所での日々においても自己を否定して生きることはできず、そうではない手立てを探し、選ぶ。わたしが歴史を書くときに選んだ対象のひとり、その手立てを、書く、こととした。彼は異様な音を脳に聞き、自分の肉体が崩れゆくにとらえ、うまく効かない手にあうペンを探しながら歴大な文字を書き、自分自身と自分が生きる世界についての思索を綴った。20世紀前半の療養所のなかで、彼ほど多くの文字を書き遺したものはいなかっただろう。自己の記録を残してきたかどうかはべつとしても、多くの療養者がいったんは自己否定という軌を自覚したこととおもう。くりかえせば、隔離の場に生きるということは、その外の社会にいる自己を否定したりさせられたりしたのだから。病む肉体を否定したり疎外したりしながらも、それとともに生きることを、ことあるごとに選んだとき、「かけがえのない、ただの私でいるために」（ウ4）、隔離という万力の構造に「のみこまれないために」、療養所に生きる療養者になったのだとおもう——いまはもういない父母に祖父母に、「おかげさまで、私は「知念ウシ」になりました」（ウ289）と報告できた彼女の言葉を借りて、いま、このように療養者の生をいいあらわせるように、わたしはおもう。彼女の「自己解放」は、「琉球人であること」「沖縄人であること」「女として生きていること」（ウ4）を介しての実践だという。それはまた、過去から現在にまでいたる時間と空間と体験とを、つまりは歴史を生きるということでもある。自己を縛り、まただれかと繋ぐそれを「愛していようが、憎んでいようが」、それを生きるとの決意の表明が彼女の著述となったのだった。

イブツコンニュウ

ReD は記録することをねちっこく再考します

「自己の内側をたっぷり見つめて」きたひとがようやく、自己疎外というわたし自身によってわたし自身を貶める暴力からの自己解放への手立てをみとおすのだろう。「自己の内側をたっぷり見つめ」るためには、自身を自身で「一皮一皮剥ぐように」凝視することが必要となる。これにもまた痛みがともなうはずだ。それを経て、「私は自分が肯定できるようになるのだろう（ウ 3）。その実践を阻止し、否定し、その営みを否認する暴力を「植民地主義」という。

ゆ く 知念のいう「植民者」とは、自覚するとしないとにかかわらず、わたしではないだれかに対して、そのひとのうちに「劣勢意識」を埋めこむ行為者なのだとおもう。こうした行為がまとまっておこなわれるようすが、その仕掛けが、それにしっかりと異議申し立てすることなく、いつのまにか、知らないうちに、それと気づかないふりをしながら押しすすめてしまうようすが「植民地主義」となる。

わたしは、「自分がいかに植民者であるか、どのようにそうなったのかを一皮一皮剥ぐように語って」はいない。ただわたしは、自分の調査と研究のフィールドとしている療養所において、わたしがなにをしてきたのかをできるだけ記録しようと努めている⁸⁾。療養所という生活の場で、わたしはその当事者にはなれない。その歴史はまず、それをだれよりも切実に必要とする、そこに生きる当事者によって記されてきた。その生きる場の療養所が開園から 100 年を経て、平均年齢が 80 歳台となり人数が 70 人となったところで、その自分たちの歴史にかかわるようすがかわってきたようにわたしは感じている。そうしたときに、部外者がその立場を自覚しながらおせっかいの介入をする必要があると判断して、さきにふれたとおり、そこで史料の目録やリプリント版をつくってきた。

歴史家は、ときに強引に、ときに功利の欲望を露わにしながら、自分たちが「史料」と呼ぶ過去からの痕跡を利用する。そのさい、せめて歴史学研究者としての責務を果そうとするのであれば、「史料」なるものを整え、その保存をはかり、できるだけ公開に努めつつ、それを活用する手立てを発信してゆくのがよい。さらにはまた、そうしたあれやこれやの

⁸⁾ この構えを「書史」と呼んでみた（阿部安成「島の書、書の園—国立療養所大島青松園をフィールドとした書史論の試み」『国立ハンセン病資料館研究紀要』第 2 号、2011 年、を参照）。

ReD は記録することをねちっこく再考します

自分のおせっかい加減やその度合いをもきちんと記録することが大切だとわたしは考える。ある機会に、こうしたわたしの構えを披露したところ、おせっかいした記録なんて、してもいいし、しなくてもいい、と片づけてしまう歴史家からの冷ややかな反応があった。これはなんと貧しい感度なのか。

当事者の生きる場と研究者のフィールドとが重なるばあいがある。そのとき、当事者の暮らしの場が研究者の仕事場となる。その場が両者になにかしら作用することが、ときにあるのだ。歴史を共有したなどと快哉を叫ぶのは鳥漣おまがましい。だからわたしはせめても表現として、「共振」という言葉を選んだ。共振が調和となり得るのかもみれず、そうではなく不協和音を発することもある。そうしたようすを記録することが、歴史学研究者の務めなのだとおもう⁹⁾。大島でわたしは、わたしが手をつけるまでおそらく数年、もしかすると十数年ものあいだ信徒からも忘れられていた教会堂の図書室がだんだんときれいに整ってゆくようすを目の当たりにした。きちんと言葉をとおして確認していないのだが、それは、わたしには、「共振」と呼びたくなる大きな変化だった。許されるのであれば、おせっかいの成果とでもいっておきたくなるかわりようだった。だから、わたしたちはおせっかいをも記録しなくてはならないのだとおもう。

いまのわたしにはそれがせいぜいのところ。まだ工作中。これからもさきへゆくとの気構えはある。自分のとなえる説が正しいとか自分の作業や仕事が適切だったかを確認するためではなく、みずからの仕事場で、「私は自分が肯定できるようになった」といえるかどうか、この自己点検が colony である療養所で自分自身の colon のぐあいやていどを検査することにつながると学んだ。

(2015年6月30日脱稿)

□ 附記 □本稿は2015年6月2日開催の[ワークショップ ReD]「辺野古の今一不屈の現場」のコメントにさいして配布する予定で書き始めたものの、脱稿がいまになってしまった。この日のワークショップでの議論に感謝する。ありがとうございました。

⁹⁾ 療養所ははっきりとした男社会である。そうした場へ介入する自分のおせっかいを記録するとき、その記録者としての自己の「男性性」を自覚せよとの大切な指摘を坂野鉄也から受けた。